

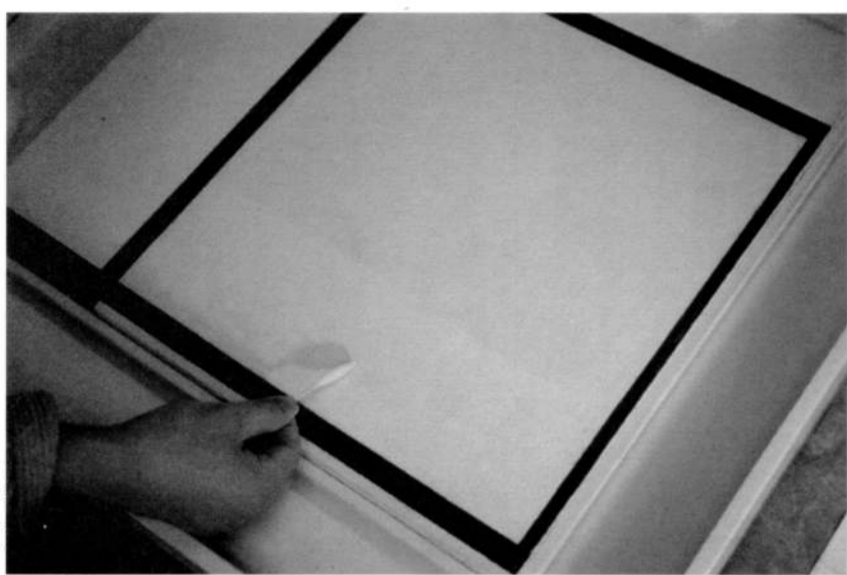
絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

が多かったですね。でも、私は個人的に（ものすごく忙しいにしても！）とても明るい気持ちで過ごしました。何と言っても、仕事で画材関係のところ立ち寄ると、「JAM誌読んでるよ！」と言って下さる方が沢山いて、とても嬉しくなってしまうのでした。世の中も、春の予感と共にちょっと明るいニュースが増えるといいですね……。

そうそう、明るくなったというところでは、実は今日の私はアトリエでの仕事にすごく満足して戻ってきたところなのです。

10月からずっと悩んでいたバルビゾン派の一枚のルソーの絵が、今日やっと「よし！」と思える状態に、つまり暗かった絵の表面をとて明るく、もとの色に画面を戻す事が出来たからなんです。今までに沢山のテオドール・ルソーの絵にふれてきた自分にとって、今回持ち込まれた作品は、そのニスの黄ばんだ表面がなんだかもつたりとして不自然に思えていました。そしてやはり調



絵の白い部分に、ヒビ割れが沢山でき、それをかくすために塗られた白（油絵の具）が変色。それを除去しているところ。

べてみると、そのおかしなニスには作品の表面が古い黄ばんだニスで覆われているように見えるために、白や黄の色が入っていました。そしてその色ニスの上にはまた違った種類の、紫外線検査光線を阻害するニスが塗られていたのです。

しかしこの絵がもつと問題だったのは、これらニス層の下の絵の具層部分には、大変広範囲な古い補彩があつて、制作当初には描かれていたらしい数本の木立が、油絵の具によって上から消されてきたことです。この、上から塗られた補彩の絵の具は、周囲の色とは明らかに異なって変色をしていました。このことから判断すると、比較的新しい合成ニスを塗った人物よりもっと以前の修復家がやったことのように感じました。

しかし、これはまたルソー自身による書き直しなのかもしれないのです。この辺が判断のむずかしいところ！

私の直感としては、それは古い修復家の未熟な修復の痕だと思ひ、この不必要に塗られている変色した絵の具を落として、その下に見えているさわやかな青灰色の空を出したかったのです。しかし、そうかといって安易にそれを落としてしまうと、真贋の判定に使われる事も多いカタログ・レゾネと大幅に違ってしまうことにもなり、大問題になってしまうのです。

そこで、ともかくまずは周囲の顔料と、この上

から塗られた色、特に白色顔料を調べる事と、レゾネの写真と比べたり、その写真が撮られた年代を調査する事にしたのでした。そして結局、そのレゾネの写真は、修復前のものだとわかり、また上から塗られた絵の具は下の空の部分に含まれている白色顔料と組成が違う事から、その部分は昔の修復家が洗浄をしすぎてルソーが訂正した木立を擦りだして、この部分を隠すために油絵の具を塗ったのだという事がわかりました。

今回、結果的には足固めの調査で裏を取りながら修復をすすめていくと言う正攻法で仕事をしたので、でもやはりはじめに直感していた「こう直すべきではないか」という判断は正しかったのだと言う事も実感できました。もちろんこういうケースでは調査をする事が大変大切なだけけれど、それでもこうした経験による「カン」というものがなければ、実際の絵の具を落とす仕事は出来にくいのです。

で、今日は自分で「ずいぶん



過去の修復に発生した亀裂上に過去に油絵の具が入られたが、それが黒く変色している。

長いことやってきたんだね」と思わずすっきりと綺麗になった絵を前にして感慨にふけてしまいました。（つまり歳をとったなという事デス！）それと同時に、今回のこの絵は、オリジナル部分が殆ど見えない状態で何年も気づかれないまま放置されていた訳で、私はこれに近い状態の作品を何度も見てきましたが、たいがい画面の何らかのダメージを隠すために必要以上にオーバーペイントされたその下には、かなり無傷で美しい巨匠のタッチが眠っていて、このような状態の絵が一体どれくらいまだ他にあるのだろう、と思つてしまいます。

そこで皆様にお願ひ！なのですが、こうした傷のついた作品には、油絵の具で補彩をしないで大丈夫です。だいたい、傷より大幅にはみ出して塗られている事が多いですし、もし色がきちんと合つて、すごく上手くいったとしても、油絵の具に含まれている油分はだんだんに暗色化していつてしまうので、（元の絵画もそうですから）数年後には、その補彩したところがはつきりと判つてしまふようになります。もし、人物画の顔のところだったりなんかするとコワイですよ……。

それから、良くあることなのですが、こうした傷ついた作品を、まだ作家さんが存命中だからと、持つていつて本人に直してもらおう、ということ。同じ理由で、あとで変色して大変なことになつてしま

まいます。前に見た海老原喜之助の作品の例では、バリで描いた雪山の風景を、本人が日本帰国後に、移送中についた細かい傷みを消すために同じ白い絵の具で化粧直しをしたのでしよう。でもその雪山は、無造作に後で塗られた白のタッチがだんだん目立ってきて、爆発したみたいな山になつちやうたのです。ですから作家の方も、後で絵を書き直す時、こうした点に注意なさると良いかと思ひます。

そして、もし傷のある作品に出会ったら、是非プロの修復家にお任せください！（エへへ、営業上手!）

でも、絵つてほんとにデリケートなデスヨ。絵画に起るすべてのアクシデント、現象には全部理由があるし、簡単な様で難しいのです。それでは、次回もさまざまな絵画の扱いかたのコツや、画材のお話をしたいと思います。それでは、また！

（つづく）



修復に使われる補彩用絵の具。顔料を、変色しない特殊なメドウムで溶いて使う。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は横浜で修復工房を主宰。